明治20年代の我が国の家政教育分野における住宅の衛生面 を改良する計画論上の試みについて

衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その2

ON THE TRIALS SHOWN IN THE IDEAS OF PLANNING METHOD FOR IMPROVING ON THE HYGIENIC ASPECT OF DWELLING HOUSE BY TEXTBOOKS FOR HOME ECONOMICS IN JAPAN IN MEIJI 20'S PERIOD

Historical studies on the planning method of house from
a viewpoint of hygiene Part 2

宮崎 信行*, 青木 正夫**

Nobuyuki MIYAZAKI and Masao AOKI

In this paper, we described concretely the contents of some trials that were shown us by textbooks for home economics in Japan in Meiji 20's period.

The point of the contents in the idea of planning method is presented as follows; the planning method of house is that it was firstly to arrange the dwelling rooms to face on the outside, and it was secondly to arrange precedently the dwelling rooms for the child and the old to face on the south, and it was thirdly to arrange the Japanese-style toilet to face except on the north.

Keywords: Meiji 20's period, hygienic aspect, planning method, trial in the architectural idea of planning method, textbooks for home economics

明治20年代, 衛生面, 平面計画, 計画論上の試み, 家政教科書

1. はじめに

前稿¹⁾では, 明治10年代の我が国の家政教育分野において, 住宅の衛生面を改良する計画論上の試みが行われ, 家族居室の南面配置を始めとする平面計画の内容が提示されたことを明らかにした。本稿では, 明治20年代の家政教育分野においても, この計画論上の試みが行われ, 平面計画の内容が一層具体的に追究されたこと明らかにする。このため, 本稿は前稿に続いて, 当時の家政教育文献を取り上げ, そこに現れた計画論上の具体的内容及び具体化の過程を詳細に考察するものである。

明治10年代に提示された平面計画の内容は, 寝室を含む家族居室の南面配置を始め, 書斎の北面配置, 台所・浴室の南面配置, そして便所の北面配置など, 計画論上の試みの貴重な成果を示した。しかし, その内容は, 衛生面に偏る傾向を脱していないだけでなく, 衛生にかかわる諸室を取り上げただけであり, しかも家族居室の中身が不明であるなど, 不十分さも多く残っていた。これらの不十分さは, 計画論上の試みの第1段階であったと

いう歴史的制約の側面が大きいが, 教授内容が初等教育の水準であったという側面も無視できない。

これに対し, 明治20年代には, 家政(家事経済)に関する女子中等教育が勃興する。中等教育であるから, 教授内容は初等教育のそれよりも具体的であり, かつ詳細である。このことは, 衛生面に関わる平面計画の内容も一層具体的に追究されるであろうことを意味する。住宅の衛生面を改良する計画論上の試みは, こうして第2段階に入るのである。

ところで, 我が国の女子中等教育を振り返ると, 明治20年代後半に教育制度が確立し, 明治30年代から学校教育が本格化する²⁾。それ以前の明治20年代には, 学校数が少なく, 女子中等教育は, 地方の要望に応じて教育書を普及するという, いわゆる在宅教育の形で勃興する。明治20年代の家政に関する文献を見ると, こうした一般向けの教育書が数多く出版されている。これらの家政教育書は, 数少ない家政教科書³⁾を含めて, 内容も表現も一様でないが, 住宅に関する限り, これ以後の家政教科

* 九州共立大学工学部建築学科 助手・工修

** 九州産業大学工学部建築学科 教授・工博

Reserch Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, kyushu kyoritu Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu sangyo Univ., Dr. Eng.

書の基礎をなしたものである。

以下、明治20年代の家政教科書や家政教育書の中から主要なものを取り上げて考察する。(表-1 参照)

2. 明治21年の林吾一著『家政読本』⁴⁾

最初に取り上げる本書は、高等女学校用の家政教科書であり、明治20年代では早い時期の家政教育文献である。

住宅に関する内容は「第二 住居家具」と題して述べられ、家具の部分を除くと、以下のように区分されている(但し、番号及び小項目題名は筆者による)。

「一. 位置ノ撰法

- ①住居位置を選定する際の要点と郊外地の推奨
- ②防湿のための住居位置と土質の条件
- ③通風のための住居位置の条件
- ④日照のための家屋と居室の向き

二. 排水

- ①排水のための敷地条件と排水路の整備

三. 家ノ大小

- ①住居規模を決定する際の要点
- ②借家料の標準と都会地での留意点
- ③住居の必要諸室と便所の位置

四. 家ノ構造

- ①家屋の和風と洋風の得失」⁵⁾

以上の大きく4項目に区分された内容は、明治10年代のそれと比較すると、欠落したものが多い。例えば、住宅の意義や目的がなく、住宅全体の計画課題がない。また平面計画の項目がなく、平面計画の重要性の指摘もない。明治10年代に到達した成果からみると、貧弱であると言える。けれども、明治10年代にみられない内容も幾つかある。例えば、第1項①や第2項がそうであり、また第3項③もそうである。このうち特に注目されるのは、第1項①と第3項③である。第1項①では衛生面を1つの側面に位置付けることを主張しており、第3項③では家族居室の中身をやや具体的に明らかにしている。

まず第1項①を見ると、次のように述べている。

「凡ソ位置ヲ撰ブニ方テ、種々ノ事情ノ看過スベカラザルモノアレバ、独リ健康ノ利害ノミニ関シテ、其適否ヲ定メントスルハ甚ダ難シ、或ハ職業上ノ便否ヲ考ヘ、或ハ子弟教育上ノ利害ヲ察シ、又費用ノ多少ヲモ思ハザルベカラズ、…」⁶⁾。

すなわち、住宅の位置を選定する際、単に衛生面だけでなく、生活面や経済面も考慮せよという主張である。換言すれば、衛生面は住宅の立地を考える際の1つの側面に過ぎないという主張である。前稿で述べたように、住宅選定条件が住宅立地条件として完成したとき、その中には通学・買物・通院(受診)等の生活面の内容が含まれていた⁷⁾。本文はそのことと対応しており、おそらくそのことを踏まえて主張しているであろう。

表-1 明治20年代の主な家政教育文献

発刊年	書名	編著者名
明治20年	世帯論	石黒務(湖東小史)
21年	◎*家政読本	林吾一
22年	◎通信教授女子家政学	瓜生寅
23年	家事経済書	飯島半十郎
	*家政学	青木文之助
	日本女子読本	吉田利行
	家政要旨	木村経策
26年	◎*家政学	下田歌子
27年	◎家政の菜	寒澤振作
	新編家政学	山崎彦八
	簡易摘要女子家政学	大西永太郎
29年	◎家事経済	後閑菊野

凡例：◎印は本稿で取り上げた家政教科書や家政教育書を示す。

また、*印は家政教科書を示す。

資料：田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成』続編・明治期Ⅲ～Ⅳ、1970年、及び国立国会図書館蔵『明治期刊行図書目録』第3巻、1973年、等による。

本文のこのような主張は、本書の内容が衛生面を主としているにもかかわらず、住宅立地の問題では衛生面を1つの側面に位置付けることを提起している。こういう提起は、明治10年代にはみられなかったものであり、衛生面に偏らないという1つの姿勢をも明示している。この姿勢は、本書ではまだ十分でないが、その後の家政教育書に受け継がれ、住宅立地の問題だけでなく、平面計画の問題にまで貫かれる。

次に第3項③を見ると、次のように述べている。

「通常住居ニ必要ノ部分ハ客室、居室、勝手室、厨房、玄関、便所等トス、西洋ニテハ一般ニ寝室ヲ設ケ、夫婦、老少各所ヲ異ニシテ寝ニ就ケドモ、我が邦ニ於テハ大抵寝室ヲ設ケズ、起臥共ニ其室ヲ同ジクス、是邦人習慣ノ久シキニ因リ曾テ其不便ヲ感ゼズト雖モ、若シ家族中病ニ罹ル者アルトキハ此設アルヲ以テ大ニ便ナリトス、便所ハ成ルベク出入ニ便ニシテ、臭気ノ室内ニ感ゼザル所ヲ撰ビテ之ヲ設クベシ」⁸⁾。

本文は、寝室や便所のことも述べているが、最初の部分では、住宅に必要な諸室を挙げている。居室部分に注目すると、「客室、居室、勝手室〔茶の間〕」である。このうち「客室」と「居室」は個々の室名であるか、総称であるかが不明であるが、いずれにせよ、「客室」が区別されたことにより、家族居室は「居室」と「勝手室」であることが理解される。また、「居室」と「勝手室」が区別されたことにより、家族居室の中身は明治10年代よりも具体的である。

なお寝室について、本文は「我が邦に於テハ大抵寝室ヲ設ケズ」と述べながらも、「若シ家族中病ニ罹ル者アルトキハ此設アルヲ以テ大ニ便ナリ」と述べている。このことは、和風住宅における「寝室」が病人の寝室すな

わち「病室」でもあったことを示している。

ところで、本書は平面計画の内容を殆ど述べていないが、その中で、今取り上げた第3項③では便所の位置と、第1項④では居室の位置(向き)を述べている。

その便所の位置について、本書は「出入二便ニシテ、臭気ノ室内ニ感ゼザル所」と述べていた。これは出入りの便という生活面と、防臭という衛生面を考慮したものである。明治10年代の家政教科書は衛生面だけを考慮して「便所は北面に配置すること」を説いていた。本書がこのことを説かなかったことは、このことを否定したことを意味するであろう。いずれにしても、便所の位置を生活面でも考慮したことは、衛生面に偏らないという先の姿勢を示すものである。

また、第1項④の居室の位置(向き)については次のように述べている。

「人ノ日光ニ於ケルハ宛モ植物ノ日光ニ於ケルガ如ク、十分ニ其供給ヲ得ザレバ以テ其健康ヲ保全スル能ハズ、故ニ太陽〔マ〕ノ地上ニアル間ハ常ニ家ノ一部分ヲ照サザルベカラズ、即チ家ノ全体ヲ南若シクハ南東ニ向ハシメ、殊ニ居室ノ如キハ之ト方向ヲ同ジカラシメテ十分ニ日光ヲ受クルヲ要ス」⁹⁾。(但し〔 〕内は筆者、以下同じ)

「居室」は、第3項③で見たように、「勝手室」と区別された「居室」である。本文はその「居室」の南面配置を主張している。家族居室の南面配置という主張は明治10年代と同じであるが、南面に配置する家族居室の中身は明治10年代よりも明瞭である。

また、本文は家族居室の南面配置を主張する理由として、日光の照射いわゆる日照の人体への影響を挙げている。すなわち人体への日照が「健康ヲ保全スル」という衛生上の考えである。この考えは、植物を例示しているから、日光の生物学的効果(医学的效果)を期待したものと理解できる。家族居室の南面配置における日照の意義は、明治10年代よりも明瞭である¹⁰⁾。

このように、本書『家政読本』は、全体の内容では明治10年代の到達した成果に及ばないものの、住宅立地の問題では衛生面を1つの側面に位置付け、住宅の諸室では必要諸室を取り上げるなど、明治10年代と異なる注目すべき内容を提示した。そして、平面計画の内容では、家族居室の南面配置を家族居室の中身や日照の意義をより明瞭にして主張し、また便所の北面配置を敢えて主張しなかったのである。

3. 明治22年の瓜生寅著『通信教授女子家政学』

次に取り上げる本書は、一般向けの家政教育書であり、衛生面を平面計画の1側面に位置付け、平面計画の内容を一步前進させた点が注目される文献である。

住宅に関する内容は「第二章 家作の事」と題して述

べられ、以下のように区分されている(但し、番号は筆者による)。

「一. 家作の三要

二. 戸外の業

三. 適当なる西洋家屋の構へ様 附玄関押入

①屏風、②臥床(ふしど)、③台所と竈室、

④圓房(いむらう)、⑤靴袋並零片袋(きふくろ)、

⑥地板下(ゆきした)、⑦建築費と家産

四. 我国の家作 附我国天然の幸福

①是迄の衣食住、②住地、③間取の心得、

④寝所の注意、⑤圓房と押入、⑥土蔵、

⑦台所、⑧食事の注意

五. 各国家作の比較」¹¹⁾

以上の大きく5項目に区分された内容は、西洋住宅を取り上げ、これと対比して我が国住宅のあり方を述べた点に大きな特徴がある。また、一般向けの家政教育書であるためか、頁数が極めて多く、前書『家政読本』が10頁足らずであったのに対し、本書は実に50頁余である。

このうち、西洋住宅を取り上げた第3項は、全頁の半分以上を占め、西洋住宅の平面図を掲げて「生活方法の規範」なるものを詳述している¹²⁾。西洋住宅を取り上げた理由は、主として家事労働の能率性や利便性が評価できるからであり、これに対し、我が国住宅は「主人の杜撰なる考より作り出せる」¹³⁾もので、しかも「野蛮の穴居(あなぐみ)より漸く一步を進めた」¹⁴⁾程度であり、これを参考にできないからである、とされる。ここには、生活の合理化を追求する姿勢が窺えると同時に、西洋住宅を模倣する傾向、それも直写的に模倣する傾向が窺える。

「諸君願くは、世帯の法則を正くせんと思はば、成丈野蛮無智の遺風を捨てて世界万国の善(よ)とする所の風俗に倣ひ、何事も道理と規律とに拠て其手順、便利を計り、銘々の重き職掌の目的を果し玉ふべし。」¹⁵⁾

(但し〔 〕内は原文の振り仮名、以下同じ。また句読点は筆者、本書引用文は以下同じ)

こうして、西洋住宅とその住まい方を模範としたうえで、第4項では我が国住宅の現状と問題点を指摘し、その改良すべき点を説いている。その中で、衛生面から注目されるのは次の3点である。

まず第1点は、衛生面を平面計画の1側面に位置付けたことである。例えば、第4項③では「間取の心得」と題して次のように述べている。

「間取は、前にも述べたごとく、一家を治る為には最も肝要の事なり。間取の便利悪ければ、健康に害あり、動作(はたらき)に都合悪く、空費多くして儉約を守るべからず。世帯は到底保ち難しとす。」¹⁶⁾

住宅の「間取」すなわち平面計画において、「健康」という衛生面は、「動作」という生活面や「空費」という経済面と並んで挙げられている。つまり、衛生面は1

つの側面に過ぎないのである。

この点については、「前にも述べたごとく」とあるように、最初の第1項でも同じことを述べている。

「一家を立てて此重き任〔すなわち子供の養育に専念して一家安全・子孫繁昌・国家長久の基礎を立てること〕を果さんには、先づ其住居〔すまい〕の間取を考ふるが肝要なり。其間取の便利悪しければ、一家の健康を進めがたく、動作を自在にせること能はず、経済〔けいぎ〕を守るべからず。』¹⁷⁾

そして、このことを「健康、動作、経済の三大事」¹⁸⁾と呼んでいる。

衛生面は平面計画の1側面であることが明瞭であり、前書での衛生面に偏らないという姿勢は、本書によって平面計画の問題にまで進展している。

次に注目される第2点は、家族居室の南面配置という主張をより明瞭にしたことである。例えば第4項①では、我が国住宅の問題点を次のように指摘している。

「甚しきに至ては、家の中処々に光明〔あかり〕を通ぜざる室〔むろ〕ありて白昼も暗夜の如く、或は一家数室の設あるも悉く人の通路に当て絶て一室〔ひとむろ〕として用ふべきものなきものなり。不経済、不健康の第一なるものなり。』¹⁹⁾

生活上の問題点も指摘しているが、住宅の中に「光明を通ぜざる室」があるという衛生上の問題点を指摘している。この「光明を通ぜざる室」とは、「不健康の第一なるもの」というから、まず居室を指している。本文の指摘を換言すれば、「すべての居室は採光(自然照明)が必要である」という主張である。このことは、第4項③の次の文章をみると一層明らかである。

「光明は前にもいふ如く人の生活に必要なものなれば、室内〔うち〕の暗きは健康を害ひ、且、夜の明るに遅く日の暮るに早く、世帯の為に第一の損なり。雨戸の上には必ず明窓〔あかりど〕を作るべし。是も亦、夜の明るを早くする為なり。』²⁰⁾

他方、同じ第4項③では家族居室の南面配置を次のように主張している。

「平生起臥する処〔すなわち家族居室〕は、必ず空気の沮滯〔とどろ〕る迷暗なる処を避け、南向にて日当りよき所を撰むべし。日光と空気は万種の動物に暫も欠くべからざるものなれば、最も意を注ぐべき事なり。之を要するに、家は都て陽気なるを良とす。陰気なるは必ず害ありとす。』²¹⁾

この主張は、内容及び根拠ともに新しい点はないが、前文及び前々文との関連を考えれば新しい意味がある。すなわち、「すべての居室は採光が必要であるが、このうち家族の居室は日照が必要である」という意味である。こういう意味が当時の人々に十分理解されたかどうかは別にして、前文及び前々文との関連を考えればそういう

ことになる。家族居室の南面配置という主張は、居室一般の採光と区別されて、より明瞭である。

更に注目される第3点は、便所の位置を具体的に指示したことである。第4項⑤では次のように述べている。

「圀房〔すなわち便所〕は成丈離れたる所、或は床〔とこ〕か押入の後杯に作り、其地板〔おき〕を高くし、下より少し風の吹込ぬやう工夫し、便器は殖栗文造が發明せしものか、前田善太郎氏の發明せしもの等の中にて便利と思ふ者を撰み用ひ、臭気の外に漏ざるやう開扉〔ひらき〕等を嚴重にすべし。』²²⁾

便所の位置については、主として防臭を図るため、「成丈離れたる所」と述べると同時に、「床〔の間〕か押入の後杯」と具体的にも述べている。このように便所の位置を具体的に述べたのは、家政教育文献の中では本書が初めてである。また、便所を北面に配置することを述べなかったことは、前書と同様である。

なお、本書は第4項④では「寝所〔寝室〕」を取り上げ、⑦では「台所」を取り上げているが、いずれも平面計画の内容を述べていない。例えば④では、湿気を避けるため「臥床」すなわちベッドを使うことや、蒲団を日光にさらして撃つことなどを述べており、⑦では、家事労働の「手順」を重視して、台所を狭くすることや高流しを使うことなどを述べている。

このように、本書『女子家政学』は、衛生面を平面計画の1側面に位置付けただけでなく、居室一般の採光と区別して家族居室の南面配置を主張し、また便所の位置も具体的に指示するなど、衛生にかかわる平面計画の内容も一歩前進させたのである。

4. 明治26年の下田歌子著『家政学』²³⁾

本書は、女子師範学校用の家政教科書であり、これまでと異なって女性の著したものである。西洋住宅を模倣する傾向を批判したと同時に、明治10年代の平面計画の内容を整理した点が注目される文献である。

住宅に関する内容は「住居」と題して述べられ、家具什器の部分を除くと、以下のように区分されている（但し、番号は筆者による）。

「一、住居

二、住居の撰定

- ①住居の撰定 ②方角の注意 ③火災を避く
- ④湿気を避く ⑤水辺の住居 ⑥水の便
- ⑦教育の便 ⑧医師の便

三、住居の構造

- ①住居の構造 ②家屋の種類 ③構造の得失
- ④屋根 ⑤床 ⑥窓戸 ⑦壁 ⑧戸障子 ⑨藁席
- ⑩室、寝室 ⑪書斎 ⑫厨房 ⑬浴室 ⑭廁
- ⑮暖炉 ⑯倉庫 ⑰井 ⑱庭園、樹木
- ⑲園芸 ⑳修繕

四. 住居の掃除

〔以下、小項目を略す〕

五. 室内の装飾

六. 移転

七. 火災、盗難

八. 風災、水害、及び震災²⁴⁾

以上の8項目は、前書『女子家政学』や前々書『家政読本』と比較すると、取り上げている問題が多い。しかも、それらの問題を詳しく述べている。このことは頁数にも現れており、前書に匹敵する50頁弱であり、教科書としては珍しく長文である。本書はこのように多くの問題を詳しく述べているので、衛生面の内容は頁数が多い割に少ない。また平面計画に関する内容も少なく、第3項の⑩～⑭だけである。

まず本書で注目されるのは、前書と異なり、西洋住宅を模倣する傾向がみられないことである。そればかりか、この傾向を批判したことである。このことは、直接には平面計画に関する内容ではないが、これに関連する問題であり、また計画論上の具体化の過程を示す問題でもあるので、やや詳しくみておきたい。

西洋住宅を模倣する傾向は前書で顕著であったが、前々書でも同様であった。前々書は著者自身がそのことを認め、前書き部分では「洋風ニ偏スル所ナシトセズ」と述べていた。そして本文中では、家屋の和風・洋風の善し悪しを容易に断定し難いとしながらも、「衣服、飲食、坐作進退等ニ至ルマデ、己ニ西洋ノ習慣ニ化シタル所ナカラザレバ」²⁵⁾として、また家屋の堅牢性や保存性も優れているとして、洋風住宅を推奨していた。本書はこれと異なり、洋風住宅を特に推奨していない。

例えば第1項を見ると、住宅は「人生、欠く可らざる所のものにして、其寒暑風雨をささへ、外物の浸入を防ぐ等、総て、身体を健康を保護するに、重大なる関係をもてるもの」²⁶⁾と述べ、衛生面の重要性を指摘している。これに続いて、「家屋の構造は、他邦の人の、是の国境に入る時、先、第一に、其眼に映ずるもの」²⁷⁾と述べ、外国人が見ても恥ずかしくないように家屋を改良せよと述べている。これは家屋を洋風にすることとも受け取れるが、本書はそのことを述べず、「家屋築造の注意、亦決して、軽忽に看過す可らず」²⁸⁾と述べ、住宅計画への注意を喚起するにとどめている。

第3項②の家屋種類の記述を見ても、火災の多い人口密集地では石造や煉瓦造がよいと述べてはいるものの、耐震上及び経済上からは木造がよいとしたうえで、前々書と異なる見解を次のように述べている。

「総て、石造、煉瓦造等は、莊嚴堅牢にして、久しきを保つべきも、本邦の如きは、其富、いまだ各国と競ふに足らず。且、坐礼の習慣、猶、俄かに、改むるに容易(たやす)からねば、粗悪なる煉瓦造よりも、寧ろ、清

素なる木造の建築こそゆかしけれ。」²⁹⁾

換言すれば、洋風住宅は確かに堅牢性や保存性が優れているが、我が国の経済力はまだ低いから、また「衣服、飲食、坐作進退等」が洋風化しつつあるとはいえ、「坐礼の習慣」は直ちになくなならないから、和風の木造住宅がよい、という見解である。この見解は、前々書の見解を批判しているだけでなく、前書で顕著であった、西洋住宅を模倣する傾向をも批判している。

しかし、本書は、続けてすぐ次のように述べている。

「然れども、家屋は、各自の職業によりて、其構造をも、異にせざるを得ざれば、決して、一様の偏見をもて、定むべきにはあらず。」³⁰⁾

要するに本書は、洋風住宅を一部の特定の人々に限定している。そしてこの立場から、多数の一般の人々に対してのみ、和風の木造住宅を推奨し、西洋住宅を模倣する傾向を批判しているのである。

次に本書で注目されるのは、第3項の⑩～⑭である。衛生にかかわる諸室を取り上げ、それぞれの平面計画の内容を述べている。引用が長くなるが、全文を取り上げると次のようである。

「⑩室(いむ)、寝室(ねむ)は、なるべく、南面にして、太陽の光温を、受るを要す。且、常住の室には、香気ある花樹を、近く植うべし。神気、常に、爽快を覚ゆるものなり。

⑪書斎は、却て、やや、北方に向へるが宜し。南面は、余り、温暖に過ぎて、身体をの弛を覚ゆること甚しく、また、東、西面は、光線の注射烈しくして、眼、常に、眩耀(くらめ)くが為に、視力を害すること少なからず。

⑫厨房(台所)は、また、なるべく、南面にすべし。已むを得ざれば、東西の中に面はしむべし。北面にして、寒く暗ければ、事を執る者、甚だ、困難なる故に、知らず知らず、不潔になすことあるべし。又、風の強くなる方向に、造る可らず。火災の恐れあり。

⑬浴室も、また、風向に注意すべし。

⑭廁(便所)は、日光の注射少く、且、風の吹通さざる、方角に設くべし。南、東などに置く時は、暑気の頃、臭気を、室内に送ること甚し。」³¹⁾

すなわち、⑩・⑪は居室部分の計画内容であり、⑫・⑬・⑭は付属室部分の計画内容である。これらの諸室はいずれも明治10年代のものと同じであり、その計画内容も明治10年代のものと殆ど同じである。唯一異なるのは便所の計画内容であり、前書及び前々書と同様に、北面に配置することを直接述べていない。

また、台所と浴室の計画内容は明治16年の日下部三之助編『小学家事経済訓蒙』と同じである。このことは、本書が『小学家事経済訓蒙』と同様に、衛生面とともに生活面を重視する立場であることを示している。けれども、本書は、前書が述べたような、平面計画において3

つの側面すなわち衛生面・生活面・経済面を重視することを明確に述べていない。

このように、本書『家政学』は、西洋住宅を模倣する傾向を批判して和風の本造住宅を改めて推奨しただけでなく、明治10年代の成果を継承しながら、衛生にかかわる諸室を居室と付属室に区別し、それぞれの諸室ごとに平面計画の内容を提示した。このうち、諸室ごとにその内容を提示した記述形式は、既に明治23年の飯島半十郎著『家事経済書』でもみられたが³²⁾、その後の家政教育文献では、記述内容が室の用途に変わりながら引き継がれるのである。

5. 明治27年の寒澤振作著『家政の栞』

本書は一般向けの家政教育書であり、家族居室の南面配置という主張を鮮明にしたと同時に、西洋住宅を直写的に模倣する傾向を明確に批判した点が注目される文献である。

住宅に関する内容は「第十一章 家屋の構造」と題して述べられ、以下のように区分されている（但し、番号は筆者による）。

- 「一. 家屋住居の撰び方
- 二. 世界中の低地
- 三. 住家の要件
- 四. 家屋の雛形
- 五. 日光空気の必要は動物植物皆同じ
- 六. 日光に触れざる処は病多し
- 七. 綿密の仕事を為すには日光を要すること切なり
- 八. 炭酸気の毒
- 九. 家屋の和風と洋風との優劣
- 十. 家作は其土地の氣候によりて異なるものなり
- 十一. 和洋折衷
- 十二. 台所構造の巧拙
- 十三. 一家装飾の必要
- 十四. 不潔者の遁辞
- 十五. 家貧ふして装飾を為す能はずとは辭言なり
- 十六. 装飾は貧富に依りて異なれり
- 十七. 家の風致
- 十八. 清潔と不潔との感情」³³⁾

以上の18項目は、題名を見ただけで内容を理解できるものが多い。このうち第6項、第7項は日光の問題を取り上げて日照及び採光の必要性を述べており、第8項は空気の問題を取り上げて換気の必要性を述べている。次の第9項、第10項は和風・洋風の問題を取り上げ、第11項はその結論として和洋折衷を提案している。その他、装飾の問題も大きく取り上げている。要するに本書は、これまでに提起された問題の中から主要なものを取り上げ、それらに対して著者独自の見解を述べている。しかし、平面計画の内容を殆ど述べていない。その理由につ

いて、第4項では次のように述べている。

「或る家事経済書などには、家屋の雛形〔すなわち平面図〕を示し、縷々説明を下し、客室部屋の位置、戸棚物置の拵へ方、台所雪隠などの所在より、隅々までの説明を付し、記載しあることもあれども、人に貧富の別あり、敷地に広狭の差あり、家内の人数に多少の差(ちがひ)ひあれば、一個の雛形にて各人各家に応用することは、到底出来ざることなれば、ここには只家を造るときに当りては、多くの人の住居の模様を見、其便利なりと思ふ処は、手本として自己の便利に供すべき様、世間多くの実物を雛形として、自ら考案を下すべきなりとの一言にて止め置くこととせん」³⁴⁾。

住宅の諸室の位置や室相互の位置関係など平面計画の内容を提示しないまま、本文はやや無責任なことを述べているが、それはともかく、こうした理由から、本書は平面計画の内容を殆ど述べていない。その中で唯一、家族居室の南面配置を主張している。注目されるのは、この主張を鮮明にしたことである。

例えば、第5項では、家族居室を南面に配置する根拠である日照の意義を次のように述べている。

「我国中等以上の人、太陽に触るれば色を黒くし、天然の美を損ずるかの如くに考へ、成るべく日に触れざるを善きことの如くに思ひ、梟や土鼠と一般、日光を嫌ふ族(やから)あるはいと笑止の至りなり、これ等は太陽の光線に依りて、身体を強壯にし、皮膚に艶を生じ、色を善くするの、実益あることを知らざるの愚より来るものなり」³⁵⁾。

人間(動物)も植物と同様に日照が重要であることは明治21年の『家政読本』が説いていたが、このことを当時の人々の考えを批判する形で説いたのは本書が初めてである。日照の意義はより鮮明である。

そして、本文に続く第6項では、家族居室の南面配置を、多少分かりにくい表現で次のように主張している。

「室内に在りても光線の通ずると通ぜざるとは、大いなる関係あるものにて、薄暗き家に住む人は、顔色蒼くして皮膚の艶あしく、病氣に罹ること多きものなりと云ふ、兵營の構造により、日当りの善きと悪きとにより、同一の地に住む兵士中に、病人の数に著しき差ありとのことは、医官の証明せし所なりと聞けり、又病人坏も光線の善く通ずる処に在ると、薄暗き室に在るとはその快復に余程の遅速あるものにて、殊に婦人の産後の快復などに在りては、尤も著しき相違ありとのことを聞けり」³⁶⁾。

「室内に在りても」とか「薄暗き室に在る」とか述べるなど、主として家族居室の南面配置を述べており、そのことを主張している。この主張は、著者の伝聞ではあるが、具体的な事実に基づいて説かれている。家族居室の南面配置という主張は、前文における日照の意義と併

せて、一層具体的であり、鮮明である。

次に、本書で注目されるのは、洋風住宅に疑問を呈し、西洋住宅を直写的に模倣する傾向を明確に批判したことである。例えば、第9項では次のように述べている。

「予思ふに洋風の建築は、光線の取り工合[マ]宜しくして、空気の流通は、我国家作の寒暑暖涼に応じて、襖障子などを開閉し、加減するの便利に及ばざるが如し、…我国は北海道を除けば、大抵北緯四十度以下の間に位する温帯の国柄なれば、強ちに西洋風に模して処々に窓を設ける位の家作は、氣候に比較しては、如何やと思ふふしなきにもあらざるなり」³⁷⁾。

温帯地方という我が国の氣候に照らして、主として通風の点から和風住宅を評価し、洋風住宅に疑問を呈している。この疑問は、次の第10項では西洋住宅を直写的に模倣する傾向を批判することにつながっている。

「一体家作は、其土地の寒暑風雨霜雪等の模様によりて、変化あるべきものにて、他国他郷のものを其儘に用ふことは、世に謂ふ杓子定木の譏りを免るべからざらん、寒帯の家作法を熱帯地方に移すべからざるが如く、熱帯地方の住居の模様を、寒帯地方に採ること能はざるべし」³⁸⁾。

それではどうするかと言えば、氣候の似ている国の住宅を模倣することもできるが、和洋折衷にするというのが本書の主張である。

「愚案にては学校官庁兵營の如きは、洋風の方此上もなき便利なれども、人々の住家に至りては、先づ和洋折衷の主意にて、応接の間、勉強室位を洋風にし、其他は和風に為すこと、便利の点より云ふも衛生の点より云ふも宜しかるべしと思ふなり」³⁹⁾。

こういう和洋折衷論はともかくとして、洋風住宅の問題点を氣候という衛生面から指摘したのは、家政教育文献の中では本書が初めてである。前書『家政学』での生活面や経済面からの指摘と併せて、洋風住宅の問題点は一層明瞭になっている。また、西洋住宅を直写的に模倣する傾向を明確に批判したのも本書が初めてである。本書が述べた見解は、前書の見解と併せて、その後の家政教育文献に大きな影響を与えている。

なお、衛生面を平面計画の1側面に位置付ける考え方は第3項にみられるが、指摘するだけにとどめたい。

6. 明治29年の後関菊野著『家事経済』

本書は雑誌『女学講義』に明治28年から掲載された一般向けの家政教育書であり、ここで取り上げるのは明治29年に掲載された住宅に関する部分である。本書はその後、明治31年に共著『家事教科書』と改題し、高等女学校用の家政教科書として刊行されている。この『家事教科書』は以後毎年のように刊行される家政教科書の最初のものであり、住宅に関する内容も充実したものである。

そういう充実した内容が既に明治29年に説かれていた点に注目し、本書を取り上げる。明治20年代で最も注目される家政教育文献である。

住宅に関する内容は「第四章 一家の要務」の「第一節 住居に関する事項」と題して述べられ、以下のよう

- 第一 緒言
- 第二 住所の撰択
- 第三 家屋の建築
- 第四 畳及び建具
- 第五 門墻庭園附井戸⁴⁰⁾

以上の5項目は、明治20年代のこれまでの内容をよく整理したものであり、それらを言わば集大成したものである。例えば、第2項は住宅立地条件であり、これまでに説かれた内容を「衛生」「経済」「便利」「快楽」という4つの側面に分け、それぞれ独立した小項目で述べている。衛生、経済、便利という側面の他に、快楽すなわち安心して定住できるという側面を付加した点が新しい。次の第3項もこれまでの内容を整理して述べているが、単に整理するだけでなく、新しい内容も付加している。本書で注目されるのはこの第3項である。

その第3項の第1の小項目では「目的」と題し、「其の国の氣候風俗に従ひ、各自の職業と生計の度とに基づき、又人々の嗜好に由りて、各(おの)其の当を得るを要す」⁴¹⁾と述べ、上記4つの側面が重要であることを改めて述べている。次の第2の小項目では「構造」と題し、家屋の和風と洋風を比較して、氣候・風俗・経済等の点から、「普通の家屋は猶国風[すなわち和風]に由(よ)るを適當とす」⁴²⁾と述べている。更に第3の小項目では「種類」と題し、構造物の種類を挙げたうえで、「木造は…我國の氣候風俗に適ひたる建築法にして、衛生上経済上最も普通の家に適當のものなり」⁴³⁾と述べている。

西洋住宅を模倣する傾向は前々書『家政学』によって批判され、直写的に模倣する傾向は前書『家政の栞』によって批判されたが、本書はそれらの批判的立場を継承しながら、一般の住宅を対象にして、和風の木造を確然と推奨している。

こうして、第4の小項目では「間取」と題し、和風の木造住宅を対象にした平面計画のあり方を述べている。以下、この小項目の内容を詳しく考察する。

6.1 住宅諸室の種類と用途

まず、住宅の諸室を述べた部分である。「間数の多少各室の広狭等は、家々の必要に應ずべきものにして、一様ならずと雖も、其種類につきて列挙すれば」⁴⁴⁾として、本書は次の19室を挙げている。

「玄関・控の間[玄関の間]・応接の間・座敷・二の間・小座敷・茶室・書斎・居間・部屋・寝室・茶の間・台

所・化粧部屋・納戸・土蔵・物置・湯殿・廁」⁴⁵⁾

住宅の居室は「応接の間」から「茶の間」までの10室である。このうち「茶室」までの5室は主として接客室であるから、残りの5室「書斎」「居間」「部屋」「寝室」「茶の間」が家族室、すなわち家族居室である。

本文に続いて、今度は上記19室の用途をそれぞれ説明している。まず居室についての記述を見ると、引用が長くなるが、次のようである。但し、接客室は「応接の間」と「座敷」のみを取り上げる（番号は筆者による）。

「①応接の間は多く用談の客をここに請じて対話応接する間なり。控の間に隣りて置くを普通とす。装飾は相当に施すべし。又座敷或は小座敷を以てすべての客をあしらふ処とし、此の室(へや)を用いざるも妨げなし。②座敷は客に接し、或は之を招待して、饗宴を開くに用いる等、一家中最も主要なる処なれば、床飾棚飾等室内の装飾及び前栽の景色等に由りて、客の心を慰むるに足るべきを要す。

③書斎は書見する場処なり。故に多くは之を以て主人の居間とす。座敷とあまり隔たらざるをよしとす。

④居間は誰にもあれ、常の住まひの間をいふ名なれども、今ここには主として之を主婦の居間とす。主婦は家事を支配する人なれば、其居間は各室に交通の便利なるを可とす。

⑤部屋の部は隔の義なれば、凡て一間一間に仕切りたる処をいふなり。老父母の部屋、子女の部屋、書生部屋、乳母の部屋、下男下女の部屋等家々の必要によりて種々あるべし。其の関係のある処を考へ処々にほどよく配置すべし。

⑥寝室は一家中にて最も奥まりたる処をえらび、且つ光線の射入空気の流通よろしくして、湿気に犯されざるやう注意すべし。広き家にては別に之を備ふれども、普通は居間部屋等を以て之に充つること多し。故に便宜によりては之を欠くも妨げなし。

⑦茶の間は家族団樂して食事喫茶等をなす場処なり。特別の装飾を要せずと雖も、清楚にして明るく快豁なるをよしとす。台所に近く、又主婦の居間とも余り隔らざるをよしとす。」⁴⁶⁾

以上のように、本書はそれぞれの居室の用途を平面計画の内容を含めて述べている。このうち「部屋」は総称であるから、家族居室数は5室よりも増加する。本文の説明では「老父母の部屋」と「子女の部屋」があるから、家族居室数は少なくとも6室が数えられる。

ところで、「寝室」は主として衛生上の注意が説かれ、その用途が説かれていない点に注意したい。「寝室」という用語は、明治15年の『家事経済論』で使われて以来しばしば使われているが、もともとは衛生に関する翻訳書等のベッドルームの訳語ではなかったかと推察される。この「寝室」なる訳語が、日常的な寝室を意味しただけ

でなく、非日常的な「病室」をも意味したことは、明治21年の『家政読本』が示したところである。本書もまた「病室」と理解しているようであり、「広き家にては別に之を備ふ」と述べている。

次に付属室について、「台所」「湯殿〔浴室〕」「廁〔便所〕」の記述を見ると、これも引用が長くなるが、次のようである。

「①台所は人々に大切な食物の製造所なり。されば、相応に広くして、其の位置よろしく、諸具を置くに便利にして、又十分清潔を保つことを得るやう注意すべきなり。

②湯殿はあまり吹き曝しならざる処をよしとす。衣服を着替ふるに便利なるやう、適宜の場所を設け、浴場には流板を張り、高窓に造るべし。井戸に近く台所にも遠からぬ処に設くべきなり。

③廁は十分其の建築法に注意せざる可らず。疎漏に造るときは不潔物地中に染み込め、飲用水を害することあり。且つ悪臭の発散によりて、周囲の空気を不浄ならしむべきなり。位置はなるべく家の隅の方を撰び、室内より見えざる様にすべし。光線の射入はあまり劇しからざるをよしとす。是れ日光によりて不潔物分解し、臭気を発すること一層著しければなり。然ども、北面(きたむき)に設るはよろしからず。猶南面又は東南西南面に建べし。是れ北は陰湿にして且つ冬季寒風の吹き入て、人身に害を及ぼすの恐あればなり。故に日光を遮り、不潔物の発散を防ぐには程よく樹木を植えならぶるをよしとす。空気の流通も亦適宜ならしむべし。窓は上下に設くるを便利とす。是れ換気によろしきのみならず、塵埃を掃き出すに便なればなり。窓の戸は不透明硝子をよしとす。紙障子は雨にあひて破れ易し。雨戸を用いがたき処に硝子を用いるは最も便利なりとす。」⁴⁷⁾

便所の記述は最も多く、懇切丁寧であり、その内容は専ら衛生面である。また台所の記述は少ないが、「十分清潔を保つ」と述べているから、やはり衛生面を重視している。けれども、浴室の記述は生活面の内容だけである。したがって、衛生面から注意すべき付属室は便所と台所である。

これら2室の位置をみると、まず台所について、本文は「其の位置よろしく」とだけ述べており、後掲する引用文は「北向を避くべし」とだけ述べている。明治26年の『家政学』は「已むを得ざれば、東西の中に面はしむべし」と説いていたものの、「なるべく南面にすべし」と説いていたから、本書はその南面配置すら説いていないことになる。このことは、『家政学』と異なり、台所を東面または西面に配置することを示唆している。

次に便所に至っては、本書はこれを北面に配置することを明確に否定している。その位置は「なるべく家の隅

の方を撰び、室内より見えざる様にすべし」と述べており、樹木さえ植えればむしろ南面もしくは南側に配置することを主張している。この主張は明治20年代のこれまでの内容を発展させたものであると言える。

6.2 平面計画の要点

次に、住宅の平面計画を述べた部分である。「以上挙ぐる処の各室をして、其間取を宜しからしめんには、よろしく左の数条に注意すべし」¹⁴⁸⁾として、本書は「衛生」「便利」「経済」の3つの側面を挙げ、それぞれ留意すべき要点を述べている。このうち「衛生」の側面では、「空気」と「光線」の問題を取り上げている。

まず「空気」の問題では、新鮮な空気を呼吸することの意義を説き、室内空気を汚染する要因や換気の必要性を説いた後、次のように述べている

「此故に間取をなすには、程よく縁側又は廊下を設けて周囲の開豁(かかく)ならんことをも計るべく、又上下大小種々の窓を作りて換気法、即ち新鮮なる空気と不潔なる空気の入れ換へをなすに適せしむべく、又各室は其の広さを適宜にし、殊にその配置の巧ならんことを勉むべし。然るに若し間取り法拙くして、四面皆他室に囲まれて、空気の流通自由ならず、光線の射入も亦乏しきが如き室を作り、或は台所の位置あしくして、煙を座敷居間等他室に吹き入るが如き不便を生じ、或は厠に接近して、不潔の瓦斯を室内に送るが如き間取をなさば、是れ空気に関する注意に乏しきものにして、衛生上に害あるは勿論其他の不便をも伴ふものなり。」¹⁴⁹⁾

平面計画の内容を整理すれば、①居室はその4面が他室に囲まれないように配置すること、②そのために、居室には縁側または廊下を適当に隣接させること、③台所は煙が居室に届かない位置に設けること、そして④便所は臭気が居室に届かない位置に設けること、と理解できる。このうち、①は既に明治22年の『通信教授女子家政学』が採光の点から示唆した内容であるが、採光及び換気の点から明確に述べたのは本書が初めてである。また、②は本書が初めて提起した内容である。

次に「光線」の問題では、日照の意義を動植物の例を挙げて説き、とりわけ老人や子供にとって重要であることを説いたうえで、次のように述べている。

「此故に間取をなすにはよく其方向を撰び、又各室の配置を程よくして、光線の射入に乏しからざるやう、注意すること肝要なり。方向は東南西南等を最もよしとす。正南もあしきには非れども、其の反対の一方が正北となりて、終日光線の射入十分ならざるの嫌あり。各室中最も明くして暖かきを要するは、老父母及び幼児の部屋なり。居間寝室等之に次ぐ。其他茶の間化粧部屋等も明きを要すること、前に云るが如し。台所も

亦北向を避くべし。台所の北向にして日当りあしく、三冬の寒風身に浸むが如きは堪えがたきことなるのみならず、冬は一般に北風多きものなれば、煙を他室に吹き入る恐あり。然れども書斎の如きは、却て北向を好む人多し。子女の勉強室の如きも亦然り。是等は其の望みに従ふべきなり。是れ強き光線は視力を弱め、暖気は睡眠を催さしむれども、北は朝夕光線の変化少くして、書見などに適すればなり。」¹⁵⁰⁾

居室の平面計画に注目すると、①家族居室は南面に配置すること、②但し、書斎や子供の勉強室は北面に配置すること、と理解できる。このうち①については、南面に配置する家族居室は、第1に「老父母及び幼児の部屋」であり、第2に「居間寝室等」である。家族居室の中身は具体的であり、南面に配置すべき優先順位も明瞭である。家族居室の南面配置の主張は本書によって一層具体化されている。

このように、明治29年の本書『家事経済』は、和風の木造住宅を対象にして、衛生面を平面計画の1側面として取り扱い、住宅諸室や平面計画の内容を整然と、しかも具体的に述べるなど、明治20年代のこれまでの内容を発展させながら総括的に提示したのである。

7. まとめ

以上、明治20年代の家政教育文献を取り上げ、そこに現れた住宅の衛生面を改良する計画論上の具体的内容及び具体化の過程を、平面計画に視点をあてて分析し考察してきた。これらをまとめると、以下のようである。

まず計画論上の具体化の過程について、明治20年代の女子中等教育の分野でも、明治10年代の成果を継承しながら、計画論上の独自の試みが行われた。この試みは、当初は西洋住宅を模倣する傾向を示しながら、衛生面を平面計画の1側面に位置付ける方向で進展していた。そして、住宅にかかわる問題を広く取り上げる方向と併せて、諸室の用途や計画の内容など平面計画の全体を取り上げる方向で進展していた。

次に計画論上の具体的内容について、居室の平面計画では、①居室はその4面が他室に囲まれないように配置すること、例えば、縁側や廊下を適当に隣接させること、②家族居室は南面に配置し、とりわけ老人や子供の居室は優先して南面に配置すること、③但し、書斎や子供の勉強室は北面に配置すること、等であった。

付属室の平面計画では、①台所はできるだけ南面に配置するが、やむを得ない場合は東面または西面に配置すること、あるいは煙が居室に届かず、便所と離れた位置に配置すること、②浴室を南面に配置する主張はなく、防災面から風向きに注意し、また生活面から井戸に近く台所に近い位置に配置すること、③便所は、樹木を植えればその位置が自由であるが、北面に配置すべきでない

こと、あるいは臭気が居室に届かず、生活面から出入りに便利な位置、例えば押入の背面または床の間の背面に配置すること、等であった。

このように、明治20年代の家政教育分野においても、住宅の衛生面を改良する計画論上の試みは行われ、平面計画の内容は明治10年代よりも一層具体的に追究されたのである。とりわけ、家族居室を南面に配置することは、日照の意義を明瞭にしながら、平面計画の主要な内容の1つとして、引き続き追究されたのである。

注及び引用文献

- 1) 宮嶋信行・青木正夫：明治10年代の我が国住宅の衛生面を改良する計画論上の試み－衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その1－，日本建築学会計画系論文集，第458号，1994年4月
- 2) 我が国の女子中等教育の学校は，明治10年頃からその必要が叫ばれ，東京・横浜・大阪などに私立女学校が設立されたことに続いて，明治15年に「東京女子師範学校付属高等女学校」が設立されたことに始まる。女子中等教育の学校はこれ以後「高等女学校」という名称で呼ばれ，明治26年には「女子教育に関する件」が布告され，次いで同28年には「高等女学校規定」が制定された。（文部省編：学制百年史，1972年，等による）
- 3) 前稿では「家事経済の教科書」を「家事教科書」と称したが，不適当なので，本稿ではこれを「家政教科書」と改めた。
- 4) 田中ちた子・田中初夫編：家政学文献集成，続編・明治期Ⅲ，1970年所収
- 5) 林吾一：家政読本，上巻，明治21(1888)年，上掲4) 家政学文献集成，p p. 15～18
- 6) 同上，p. 15
- 7) 明治15年の藤田久道編『家事経済論』を指す。
- 8) 上掲5) 家政読本，p. 17
- 9) 同上，p. 16
- 10) 但し，明治19年の進藤直温編『女子必読』は，本書ほど明瞭ではないが，同様の日照の意義を述べていた。
「太陽の光線は身体の発育に必要なものなり。故に，家屋は成るべく日光を受け溶るやう注意すべし。若し室内暗黒にして湿気を帯る人は，皮膚蒼白，終に疾病を生ぜしむるなりとす。」（田中ちた子・田中初夫編：家政学文献集成，続編・明治期Ⅱ，1969年，p. 344。但し句読点は筆者）
- 11) 瓜生寅：通信教授女子家政学，前編，明治22(1889)年，上掲4) 家政学文献集成，p p. 97～110
- 12) 本書は「総論」の中で「米国のピーチャー氏姉妹兩人が著せし家政学綱領といへるものを骨子とし」（P. 95）と述べているが，本書における西洋住宅の平面図や「生活方法の規範」なるものは，この書物に基づくものである。

なお，この書物は翻訳教科書『家事要法』として明治14(1881)年に文部省から刊行されていた。

- 13) 上掲11) 通信教授女子家政学，p. 106
- 14) 同上，p. 106
- 15) 同上，p. 106
- 16) 同上，p. 107
- 17) 同上，p. 97
- 18) 同上，p. 98
- 19) 同上，p. 106
- 20) 同上，p. 107
- 21) 同上，p. 107
- 22) 同上，p. 108
- 23) 田中ちた子・田中初夫編：家政学文献集成，続編・明治期Ⅳ，1970年所収
- 24) 下田歌子：家政学，下巻，明治26(1893)年，上掲23) 家政学文献集成，p p. 126～143
- 25) 上掲5) 家政読本，p. 17
- 26) 上掲24) 家政学，p. 126
- 27) 同上，p. 126
- 28) 同上，p. 126
- 29) 同上，p. 128
- 30) 同上，p. 128
- 31) 同上，p. 130
- 32) 例えば，当書『家事経済書』は，住宅の作り方に「座鋪（ざい）建，商家建，農家建，西洋建等」があるとして，それぞれの必要諸室を述べたうえで，主な諸室である「座鋪（ざい）」「納戸，茶の間」「台所」「浴室」「厠」等を取り上げ，それぞれ留意すべき要点を述べていた。但し要点の中身は，平面計画の内容が「浴室」と「厠」だけであり，室の用途が「座鋪」だけであった。
- 33) 寒沢振作：家政の槩，明治27(1894)年，p p. 169～185
- 34) 同上，p p. 171～172
- 35) 同上，p. 173
- 36) 同上，p p. 173～174
- 37) 同上，p p. 176～177
- 38) 同上，p. 177
- 39) 同上，p. 171
- 40) 後閑菊野：家事経済，雑誌『女学講義』明治29(1896)年2月第4巻～12月第14巻所収
- 41) 上掲40) 家事経済，明治29年4月第6巻，p. 99
- 42) 同上，p. 100
- 43) 同上，p p. 101～102
- 44) 同上，p. 103
- 45) 同上，p. 103
- 46) 同上，p p. 105～107
- 47) 同上，p p. 107～109
- 48) 上掲40) 家事経済，明治29年7月第9巻，p. 93
- 49) 同上，p p. 93～94
- 50) 同上，p p. 95～96

(1994年3月8日原稿受理，1994年10月25日採用決定)